家に住み着いている妖精に愚痴ったら、国が滅びました 2

Sarubami Morishige
著 猿喰森繁
ill. キッカイキ

主な登場人物
CHARACTERS
ジェイフ
ポッドの友達の妖精。ぶっきらぼうだが面倒見が良い。
ポッド
エミリアを手助けしている妖精。罠から救ってくれたエミリアに恩義を感じている。
アイラ
エミリアの姉。野心家でエミリアを見下している。
エリオット
エミリアが生まれ育った国の王子。エミリアの元婚約者でもある。
エミリア
魔法が使えないために虐げられている少女。心を通わせられる友達を切望している。
シルビア
エミリアが働く大聖堂の聖女。立派な聖女を目指して修業中。

私――エミリアは、魔法が使えない。
そして、私の故郷、カラカネでは、魔法は使えるのが当たり前であり、生活から何をするのにも魔法の使用が前提とされている。
そして、有する魔法の力でその人間の地位が決まる。強大な魔法を使用出来る王族や貴族が、圧倒的な権力を持っていた。

そんな中で、私は魔法が使えないために、家族から虐げられる日々を送っていた。
ある日、私は家のキッチンで「ポッド」という名前の小さな妖精を助け、仲良くなる。ポッドと仲良くなってから、私の日々はとても楽しいものになった。
私には、ポッド以外にも味方がいた。それは婚約者であるエリオット王子だ。
だが、ある日のデート終わりに、王子は魔物が暮らす危険な森に私を置き去りにした。どうやら、魔法が使えない人間を婚約者という立場において、殺そうという魂胆だったらしい。
その窮地から、ギリギリのところでポッドに救われた私だったが、何もかもに絶望してしまう。
そして、私はポッドに殺してほしいという願いを伝えた。

かつてポッドを助けた際に、彼は何でも願いを叶えてくれると言っていたのだ。
しかし、ポッドは私の願いを無視する。そして私を救うため、それぞれの国に一柱いると言われている神――神霊を頼った。
その結果、私は住んでいたカラカネから逃げ、聖女様が暮らす国――リンゴンベリーへと向かうことになる。
無事、リンゴンベリーにたどり着いた私は、神霊の神託により、聖女候補として大聖堂で働き始めた。
だが、私は一緒に働くことになった他の聖女候補たちに虐められてしまう。
この国でも私は追い詰められて――
絶体絶命のその瞬間、ポッドとリンゴンベリーの妖精たちの力で、私を虐めていた聖女候補たちをリンゴンベリーから追い出すことに成功する。
そして、私を認めてくれた聖女様のおかげで、私は聖女様の補佐役である聖女付きに任命された。
移り変わる状況に流されながら、私はついに自分の居場所を見つけたのだ。
それから、私は心から楽しいと思えるような日々を送っていた。
同時に、私が去った後のカラカネは、神霊に目を付けられ、ゆっくりと滅亡へ向かっていた……

第一章　滅びゆく王国

エミリアが生まれ育った国、カラカネでは、魔法が使えない人間が増えていた。王族、貴族、平民と身分も年齢も関係なく、次々と。
最初は、平民から魔法が使えなくなった。
この時、大きな騒ぎになったが、国を治める貴族たちは関心を寄せることも議題に上げることもなかった。自分たちが魔法を使えているのだから問題はないという判断であった。
毎日のように平民からは、「魔法が使えなくなった。原因を調べてくれ」という声が上がっていたが、貴族はそれを無視する。
だが、貴族の中にも魔法の力が弱まり、ついに使えなくなる者が現れた。
そしてついに、魔法を使える人間は国内に数人という状態になる。国の要であった、熟練した魔法の使い手であり、「魔物殺しの王」と呼ばれる国王ですら、魔法の力が弱くなっていた。
騙し騙し生活を続けていたが、貴族ですら魔法を使えないということに気づくと、国民たちの混乱は加速する。
魔法なしではろくに生活水準が保てないほど魔法に依存していたのだから、その混乱は当たり前

であった。だが、インフラが崩れていくのを誰も止められない。

◇　◇　◇

城では毎日、国内の被害報告が王のもとに届けられていた。

しかし、報告されたとて、王国始まって以来の状況である。王もまた疲れ果て、先の見えない不安と戦っていた。

カラカネは、周囲の国々と仲が良くない。それは、カラカネが魔法至上主義かつ自国第一主義であり、鎖国のような状態だったからである。

国のことに干渉してこようものならば、国王の強大な遠隔攻撃魔法が放たれる。この魔法が、大国の部隊による攻撃と同等の威力だったため、周辺国は干渉してこなくなっていた。

カラカネから先に国交を断絶しているのだから、助けなど求められるはずもない。

ここで、この国の王がもう少し柔軟であれば、あるいは無駄なプライドがなければ、隣国に助けを求めていただろう。

だが王には、絶対にそんなことは出来ないという意地があった。

貴族が助けを求めに行かないよう、兵士に監視させるほどの徹底ぶり。他国に弱みを見せるのは絶対に嫌だという考えの持ち主だった。

それでも王は、力が弱まっていたとしても、王位にふさわしいほどの魔法の力を持っていた。

そして、今日も玉座に座る王は、疲れ果て、弱り切った大臣から報告を受けていた。

「王様……申し上げます……我が国で、魔法が使える者はもう数人しかおりません……」

王は狼狽した様子で答える。

「どうなっている⁉　なぜ、我が国の人間ほとんどが魔法を使えなくなっているんだ！　これでは、何も出来ないぞ⁉」

「は、はい……ただいま、原因を調べておりますが……未だ不明でして」

「こんなことは我が国始まって以来だ！」

「は、はい」

王に詰められている大臣は、ただ慌てることしか出来ない。

伝令係でしかない大臣は、王の言葉に何を返せば良いのか分からないのだ。

なぜ八つ当たりされなければならないのか、と心の底で思っていた。

自分だって、いつ魔法が使えなくなるか分からない。最近では、水を生み出す初歩的な魔法を使うのにも苦労をしている。

魔法が使えなくなるという焦りと緊張が、大臣の中にあった。

王も含めて、この国の人間は皆同じ焦りを抱えている。

どうして魔法が使えないのかという疑問に対する答えが欲しいのは、王だけではないのだ。
黙ったままの大臣を見て、王が言葉を続ける。
「学者どもは何をしている！　こういう時のための頭脳ではないのか⁉　毎年、金を湯水のごとく使い尽くすあいつらが、今役に立たなくてどうするというのだ！」
「は、はい……しかし、このような事態は、どんな歴史書にも文献にも載っていないと。他国の資料にも記録はないようでして……」
「それを調べ、原因を突き止めるのがあいつらの役目だろう！」
「お、おっしゃる通りで……」
愛想笑いをする大臣にイラついたのか、王は玉座のひじ掛けをおもいきり拳で叩いた。威嚇行為である。
「何を笑っている。笑ってボケッと突っ立っている暇があれば、さっさと調べに行かないか⁉」
大臣は「ひっ」と悲鳴を上げてから返事をする。
「は、はい⁉」
そのまま大臣は、玉座の間から逃げ出した。
王は大臣を見送るとため息をこぼし、玉座にもたれかかる。どうすればいいのか、本当は誰かに教えてもらいたかった。

しかし、そんなことをプライドの高い王が言えるはずもない。
「きっといつか状況が良くなる」と信じていたが、その希望は日に日に打ち砕かれていった。
魔法の力を失った国は急速に衰えていく。
魔法を頼りに生活していた国民たちは、ついに日常生活を満足に送ることが出来なくなってしまった。
火をつけることも、水を出すことも出来ない。建物の修理も整備も何もかも。
その手段がなくなってしまったのだから、当たり前だった。
国民たちの生活レベルは一気に落ち、貧民の中には、餓死者や自殺者が出てくる。治安も悪化していき、盗みや殺人が日常的に行われていた。
やがて、国から逃げ出そうとする人間も現れ始める。
しかし、隣国に自国の現状を知られたくない王の命令によって、逃げ出そうとする人間は皆、王国の兵士と貴族の私兵によって殺されてしまった。
そのこともあり、貴族と平民は完全に対立し、分断されていく。
魔法の力が戻る兆しもなく、かろうじて魔法が使えていた人間の力もどんどん弱くなっていく。
そんな不安と絶望に支配された日々がカラカネの日常となっていた。

そんな中、王のもとに様々な問題が上げられてくる。
貴族や有力者から寄せられた問題を解決するための会議が、王と大臣たちによって毎日開かれていた。
今日もまた玉座の間では、大臣たちが問題を読み上げていく。
大臣の一人は、国一番の腕前を持つ料理人からの手紙を読み上げた。
「かまどに火をつけることが出来ず、困り果てているようです。対策を考えてほしいと……」
また違う大臣は、豪農からの被害報告を述べる。
「畑の結界が切れ、働く人々が魔物に襲われているようです。これでは、食糧難になってしまいます。王よ……どうか、他国から結界魔法の使い手を呼ぶことの許可を……このままでは、食料がなくなります」
そしてもう一人の大臣は、兵士たちからの嘆願書を読み上げる。
「魔物を一匹倒すだけでも、大きな損害が出ています。怪我人を治療出来る者がおらず、離脱する兵士の数は増えるばかりです。死亡者数も無視出来るものではありません。攻撃魔法も回復魔法も使えない今、国内は魔物と戦える状態にありません。もちろん、武器や防具を修理出来る者はおりません。王よ……隣国に助けを求めてください！」
大臣たちが次々に問題を取り上げていく。

「王よ。助けを呼んでください」
「このままでは国が滅びます」
「民が死ぬ一方です」
それらは、王にとって耳も頭も痛くなるものばかり。
ついに王はキレて、話を遮った。
「これ以上は何も聞きたくない！」
感情をむき出しにする王に、一人の大臣が冷静に話しかける。
「しかし、王よ。このまま、これらの問題を見過ごせとおっしゃるのですか？　せめて、近隣の国に助けを求めるのはいかがでしょうか。私たちも明日はどうなるか……」
その言葉を聞いた王が、ついに魔法を放った。特大の火炎魔法である。
一瞬にして大臣は火だるまになり、そのまま焼け死ぬ。
王の乱心ともいえる行動に、大臣たちは震えあがり、一様に押し黙った。次に何か言えば、今度は自分が焼き殺されるかと思ったからだ。
大臣たちは、今や簡単な魔法すら使えない。
人を焼き殺すほどの魔法が使える王の姿を見て、大臣たちは王が国の頂点に君臨する人間であることを久しぶりに思い出した。

魔法がまともに使えない状況で、自分たちと王の立場が近くなったと勘違いしていたのである。
今この瞬間、王の強大な力に立ち向かえるだけの力が残っている人間が、どこにいるだろうか。
目配せをした大臣たちは、そんな人間が存在しないことを察して黙った。
そこに王の言葉が響く。
「今度、悲報を伝えた者は首を斬る！　知りたいのは、朗報だけだ！　分かったなら、とっとと失せろ！」
「「か、かしこまりました」」
大臣たちは、殺されてはかなわんとばかりに玉座の間から逃げ出した。
しかし、その後いくら待てど、王のもとに朗報がやって来ることはなかった。

◇　◇　◇

カラカネ以外の国でも魔法が使えなくなったのであれば、まだ良かった。
苦しんでいるのは自分たちだけではないのだと、これは世界の異変なんだと思うことが出来れば。
しかし、国民はそうではないことを知ってしまった。
ある日、カラカネの城門を一人の貴族が訪れた。
その貴族は、他国でバカンスを楽しむため、少しの間カラカネを離れていたのだ。自分が離れている間に、国中で魔法が使えなくなったことを知らずに。
その貴族に、門番である一人の兵士が尋ねる。
「他国では、魔法が使えなくなるという事件は起きているのでしょうか？」
「そんなことが起きているはずないだろう……」
その話を盗み聞きしていた他の兵士たちによって、その事実はあっという間に国中に広まった。
他国では未だ魔法が使えるようだ。魔法が使えなくなったのは我が国だけ。自分たちだけだ。
そのことに気づいた国民たちの絶望は、今まで以上に大きかった。
「これは、魔法が使えない者を蔑ろにしたツケだ！」と、国民の一人が叫んだ。
その言葉に、別の者が反応する。
「呪いだ！　これこそきっと私たちが迫害してきた者たちの呪いに違いないっ！」
普段であれば陰謀論と馬鹿にされるような話題でも、今のカラカネでは、あっという間に人々に信じられた。
ある者は絶望して自ら命を絶ち、ある者は神に祈りを捧げた。
教会には、過去に前例がないほど人々が押し寄せる。
普段、神に祈りを捧げたことのない人々の、困った時の神頼み。
必死に神の存在を信じ、自分たちだけは助けてもらおうという思いでいっぱいであった。

「お助けください！　私は、魔法が使えなくなってしまったのです。日ごろから真面目に働き、質素に生きていました。神がご慈悲を与えるのにふさわしい人間です。ですから、どうか私にもう一度、神の力を……」

オオン、オオンと泣き叫ぶのは、肥えた貴族の男である。

てかてかと光り輝く頭皮の周りにわずかに残った髪の毛を振り乱しながら、男はさも自分が悲劇のヒーローだといった様子で神父に助けを求めていた。

この男はこれまで、若い女を侍らせ、豪遊する毎日を送っていた。

それなのに、自分は質素倹約をモットーにしていると言ってはばからない。

高齢の神父は困惑しながらも、「神のご慈悲がありますように」とだけ伝えた。

その言葉を聞いた男は激高して、「そんな言葉はどうでもいい！　はやく神に魔法の力を戻すように伝えろ」と叫んだ。

それを聞いた周囲の人々は、男の無礼さを馬鹿にするでもたしなめるでもなく、同調する。

教会に集まった人々に、神を敬い信仰する心はない。あるのは、ただ自分の身に起きたことに対する怒りである。

「そうだそうだ！　早く俺たちに力を返せ！」

「何が神だ！　こんな神はいらない！」

「何が神父だ！　仕事しろ！」

「こういう時だろ！　お前が役に立つのは！」

「お前、本当は魔法が使えるんだろ！　自分だけ使えることを隠しているんだ！」

神父は詰め寄る人々の顔を見て、「悪魔だ……」と呟いた。

そして、気づく。もう手遅れだということに。もうこの国は、神に見放されたのだということに。

この神父もまた、信仰心はなく、教会に居座るだけの老人と化していた。

名ばかりの神父は今更ながらに思った。もっと、真面目にやっていれば……

国が滅亡する時が、すぐそこに近づいていた。

◇　◇　◇

その頃、この国の王子であるエリオットは王城の自室にいた。

部屋には外交を担当する大臣がいる。

彼らもまた、問題を解決するための方法を考えていたのだ。

王も他の大臣も貴族たちも役に立たない。

そして、このままずっと部屋にこもっていれば、今はまだ魔法が使える王子であろうと、魔法の力がなくなってしまうだろう。

エリオットは、魔法が使えない自分を認めることなど出来るはずもなかった。
エリオットにとって、魔法とは絶対だ。
今まで魔法が使えない少女たちを婚約者として選び、陰で暗殺するような真似をしていたのは、エリオットにとっての救済行為だった。
魔法が使えないということは、神からの加護を得られなかったということ。神から選ばれなかったということは、生きていても仕方ない人間だということ。そんな考えが、エリオットの中にあった。
だから、エリオットの元婚約者であるエミリアも、彼の救済行為によって殺されそうになったのである。
これから先、不幸であることが確定しているのであれば、魔物の腹でも満たして死んだ方が本人のためになると本気で思い、魔物が生息している森にエミリアを置き去りにしたのである。
エリオットの記憶の中に彼女はもういない。救済した人間のことなどすぐに忘れてしまうからだ。
そして、そんな考えを持つエリオットは、このまま自分の魔法が消えるのを待つだけの日々など、耐えられるはずがなかった。
絶対に他の国に助けを求めたくない彼の父親と違い、息子のエリオットは力を失うくらいなら、他国に助けを求めようと考える人間だ。

今までは、父親や大臣、貴族たちの目が常にあった。しかし、今はもう王子のことを心配する人間も監視する人間もいない。
エリオットは、監視の目がなくなる機会をずっと待っていた。そして、ついにその時がやってきたのだと悟る。
「どうしましょうか。王子……」
「……」
大臣の言葉を聞いたエリオットは、一通の招待状を取り出し見つめた。それは、聖女がいる国、リンゴンベリーからの招待状だ。
先代の王が存命の頃、隣国のリンゴンベリーと交流があった。
幼いエリオットは、先代の王にリンゴンベリーへと連れていってもらったことがある。その時に「殿下が大きくなった時にぜひまた」と招待状をもらったのだ。
国の王が代替わりしてからは、一生行くことはないだろうと思っていたエリオットだったが……今では隣国との縁を繋いでくれた先代に感謝しているほどだ。
エリオットは大臣に自身の考えを話す。
「隣国には、聖女がいる」
「は、はい」

「その聖女に、この国の呪いを解いてもらうように頼みに行く」
「え、はぁ……しかし、来てくださるでしょうか」
「来るさ。……まだ私には魅了魔法の力が残っているようだからな」
エリオットの切り札、魅了魔法。それは、相手を意のままに操る最強の魔法。
どんな人間も、エリオットのこの魔法の前では無抵抗になる。
毒のようにジワジワと精神を蝕まれ、やがて相手はエリオットの物になるのだ。
好意を抱く。年齢も性別も関係なく、エリオットの言葉は絶対だと思い込むようになる。
それはきっと隣国の聖女だろうと同じだ、とエリオットは考えている。
エリオットのこの能力が効かなかったのは、実の父親だけなのだから。
「ずいぶんと回り道をするはめになったが、大丈夫だ。これで全て上手くいく。そうなれば、あの頑固な王も少しは私の言葉を聞くようになるだろう」
「は、はぁ……」
大臣は頷いたが、エリオットの言葉の意味はよく分からなかった。
とはいえ、エリオットの気分を害してしまうのは避けたかった。
もし、策があるのであれば、大臣にとっても救いとなる可能性が高いからだ。そのため、協力は惜しまない。

魔法が使えないことは、この国の人間全員に共通した死活問題だ。
頷く大臣を見たエリオットは、指示を出す。
「馬車を準備しろ。すぐに出発する。……くれぐれも父上や側近に気づかれるなよ」
「か、かしこまりました」
返事をして大臣が出ていき、部屋にはエリオット一人が残る。
「ようやくか……」
エリオットは、昔見た現聖女のことを思い出し、笑みを浮かべていた。

◇　◇　◇

エミリアと聖女を襲った聖女見習いの少女たちと兵士が、行方不明になってから一週間。
その騒動の渦中にいた私――エミリアの周りは静かだった。
少なくない数の人間が行方不明になっているにもかかわらず、本当に誰も何も騒ぐことはなく、また私が何かを聞かれることはなかった。
他国からの客人という体の聖女見習いたちと、この国の兵士がいなくなっているのに……だ。
聖女様によると「彼女たちの祖国に、彼女たちが神の怒りに触れたといった旨の神託があった」とのことで、それで万事解決したらしい。

神託とは、それほどまでに絶対なのだろうか。
聖女見習いの少女たちが数人、それから兵士までもが消えても噂になるわけでもなく、ひっそりと片付いてしまうことが、正直怖かった。
彼らがいなくなったのは、妖精たちが原因である。
仮に私に聞かれても困ってしまうから、噂にならない方が良いのだけど。
そんなことを考えている私はといえば、今絶賛お着替え中だ。
聖女様から直接「聖女のお付きとして、それなりの格好をするように。よろしいですね？」と一式の洋服を渡されたのだ。
聖女様は用事があるとかで、部屋から出ていってしまったが。
鏡で自分の姿を見てみるが、あまりにも服が立派すぎて、逆に浮いて見える。
これは卑下とかじゃなくて、絶対に浮いてる。
私は不安になってポッドに尋ねる。
「……ポッド。おかしくない？」
ポッドは首をかしげた。
「うん？　何がだ？」
「だから、この格好だよ……」

「全然、おかしくなんかないぞ？」
私が着ているのは、真っ白なドレスにベール。ところどころ、フリルやレースがちりばめられていて、とっても可愛い。
ポッドの魔法によって、髪にはリボンが編み込まれていて、これまた可愛くまとめられている。
こんなに可愛い髪型にセットしてもらうのは初めてで、とても嬉しい。
それに、生まれて初めてお化粧もしてもらった。これもまたポッドの魔法によってだ。
まさか、ポッドがお化粧もヘアメイクも出来ちゃうだなんて思ってもみなかったので、意外な特技にびっくりした。
もしかしたら、過去にもこうやって女の子を可愛くしたことがあるのかもしれない。
「ポッドって何でも出来ちゃうのね」
私は思わず、そう呟いた。
私の言葉にポッドは照れたのか、笑って答える。
「そんなことないさ」
「絵本に出てくるお姫様を手助けする妖精みたい」
「まぁな」
くるりと一回転してみると、ドレスの裾がふわりと広がって、とっても可愛い。

可愛さ百二十点くらいだ……そう、可愛いのだけれど、こんなに可愛い洋服を私が着てもいいのかな、という気持ちがどうしても出てきてしまうのだ。
「……でも、不相応じゃない？」
私の言葉をポッドが否定する。
「そんなことない。立派だ」
「でも……」
「安心しろって。エミリアのことを知る奴は、この国にはほとんどいないんだから。知らない奴は、他人なんか気にしてない」
「でも、魔法が使えないのに聖女見習いだなんて……しかも、聖女様の補佐役である、聖女付きだなんて知られたら、きっと色々言われるわ。聖女様が……」
「大丈夫だって！　そのための俺たちなんだからさ」
ポッドは、そう言ってクルクルと回った。
二週間後に、王族も参加する国を挙げてのお祭りがあるそうだ。
そのため街は連日お祭りの準備で、忙しそうにしている人たちをよく見かける。
この国の神を崇め奉る神聖なお祭りだそうで、国外でも有名と聞いている。
そのため、他の国からも観光客や来賓の方がたくさん来るのだそうだ。

そんなお祭りに、私も関係者として参加するのだと聞かされた時は、倒れそうになってしまった。
さすがに私には荷が重すぎると思う。
私の他にも聖女見習いはたくさんいるのに、どうして私なのか。
そのことを聖女様に聞いたが、「妖精の友達がいるから」と言われてしまえば、黙るしかない。
加えて、私は神霊の神託によってこの国に来た。
だから、祭りに参加するのは元から決定事項だったらしい。
「そんなこと聞かされてない！」と叫んだが、聖女様に有無を言わさない笑顔で「今、言いました」と諭されてしまう。
聖女様って、こんな人だったんだ……。
部屋に引きこもってばかりと噂されていた聖女様と本当に同一人物なのか……と驚いた。
そんな聖女様も、今日は私の試着を楽しみにしているらしい。用事が終われば、戻ってきますと言っていた。
しばらくクルクルと鏡の前で回っていた私の耳に、扉を叩く音がした。
「入ってもいいですか？」
それは聖女様の声だった。
私も身支度が済んでいたのでタイミングはばっちりだ。

「はい。大丈夫です」
部屋に入ってきた聖女様は私の姿を見るなり「可愛い！」と声をあげた。
「可愛いです！　とっても！　まあ、少しお化粧してますね！　可愛い！　その髪型もとっても可愛い！　本当に可愛いですよ、エミリア」
「えへへ。ありがとうございます」
容姿を褒められることなんて過去一度もなかったので、私は照れてしまう。
しばらく聖女様は可愛い可愛いと連呼して、私の全身を見るために周囲をクルクル回っていたが、ようやく落ち着いてくれたようだ。
良かった。このまま可愛いって言われ続けたら、どうしようかと思った。
褒められるのは嬉しいけど、あんまり褒められると、どうしたら良いのか分からなくなってしまう。
聖女様が私に質問をする。
「エミリア。サイズはどうですか？」
「はい。ピッタリです」
「良かった」
にっこりと聖女様が笑ってくれたので、私もつられてニッコリしてしまう。

そのままお互いニコニコしていたけど、重要なことを思い出した私は「聖女様！」と声を上げた。
「本当に私がこんな立派な服を着ても大丈夫なんでしょうか？」
「もちろん。エミリアは聖女のお付きになったのですから。みすぼらしい服を着られても困ります」
「みすぼらしい……」
そんなにみすぼらしい格好をしていたかな、と少し落ち込んだ。
確かにこの国の人たちは、おしゃれだし、身綺麗だ。
私は着れれば何でもいいと思っているし、今まで自分の服装について考えるようなことはなかった。
だから、仕方ないのだけど。……仕方ないのだけど、みすぼらしいという表現は、ちょっぴりショック。
少し落ち込んでしまった私に気づいていない聖女様は、言葉を続ける。
「それに私と行動を共にするということは、それなりの方とお会いするということです。身なりは重要なのです。……ああ、そういえば今度、隣の国の王子が来訪されるそうです」
「隣の……国ですか？」
「ええ。エミリアが住んでいた国……カラカネの王子ですよ」

私は、その言葉に固まった。
カラカネの王子……私の元婚約者。私を殺そうとした人。私があの国から逃げ出すきっかけになった人。
「エミリア」
ポッドの硬い声に、私は頷いて返事をする。
「……もう、大丈夫だよ」
私の事情を知らない聖女様は、不思議そうに尋ねる。
「エミリア？　どうかしたのですか？」
「何でもありません。ところで、その王子に私もお会いしてもいいですか？」
「ええ。エミリアは聖女のお付きですもの。私がお会いするのですから、エミリアもそのそばにいる権利があります」
「ありがとうございます」
深呼吸する。大丈夫だ。ここは、あの国じゃない。
あの人――エリオット王子が私に気づいても、私に何かをするような真似はしないだろう。
それにあの人は、きっと聖女様に良くない影響を及ぼす。
だから、私がそばにいて盾にならなきゃいけない。

でも、やっぱり怖い。
殺されかけたのに。私以外の女の子を殺してたって教えてもらったのに。それなのに、どうしてかあの人を完全に嫌えない私の心が、とても怖かった。

◇　◇　◇

今日は、エリオット王子が聖女様とお会いする日だ。
私も一緒にいていいと言われたので、聖女様と一緒にエリオット王子を迎える予定である。
「エミリア。大丈夫か？」
心配そうなポッドの言葉に私は答える。
「うん……ちょっと怖いけどね」
「それは仕方ないさ。殺されかけたんだから」
「違うの。私、殺されかけたのに、どうしてかまだあの人のことが、好きなんだと思う」
「……え？」
ポッドは驚いた様子でこちらを見た。
「たぶん、あの人の魔法のせいなんだと思うんだけど、どうしてか嫌えないの。すごいね。魔法ってこうやって人の心まで自由に出来るんだから……本当に魔法ってすごい……あと、怖い」

私の言葉にポッドが呆然としていた。
カラカネにいた時、私はずいぶんとポッドに助けられた。
王子とデートをした日は、いつも心がぐちゃぐちゃになって泣いてばかりだったから。
王子のことが好きなのに、覚えてなくて。一日の出来事がぼんやりとして何も思い出せなくて。
王子のことが好きなのかどうなのかも分からなくなって混乱していた日々。
ずいぶんとポッドを困らせていたと思う。
こうして遠く離れてしばらく経つのに、王子のことを思い出すと、どうしてかまだ好きだという感情が残っている。
そのことを正直に話すと、ポッドは口を開いた。
「心を操る系統の魔法は副作用があるんだ。もしかしたら、そのせいなのかも？　すまない、エミリア。もう一度、術を解いてみる」
「解かなくていいの」
「え？」
私の言葉に困惑しているポッドを見て、話を続ける。
「この心と私は戦わないといけないと思うから。だから、お願い。どうか私を見守っていて」
どうして術を完全に解かないのか、ポッドには分からないだろう。

王子を好きな気持ちを残しながら、また王子と会うなんて正気じゃないと、私も思う。
また操られてしまう可能性だって考えられるんだから。
でも、今日はポッドの助けもなく、あの人を乗り越えなくちゃいけないんだと思う。
そうじゃないと、私はずっと過去に囚われたままだ。
「もし、エミリアがおかしくなったら、俺が手を貸してもいいんだよな？」
ポッドは真剣な様子でそう言った。
「うん」
そして私たちは、呼ばれていたリンゴンベリーの王城へ向かい、聖女様と合流した。
連絡通りの時間にエリオット王子が到着すると、私と聖女様は貴賓室で王子を出迎えた。
私たち以外にも、聖女様を守る兵士が部屋の中にはいる。
聖女とエリオット王子は、幼少時に顔を合わせたことがあると事前に聞いていた。
部屋に入って来た王子は、小綺麗な格好をした私が誰だか分からなかったようだ。
王子は聖女様に話しかける。
「お久しぶりです。シルビア様。幼少期以来ですね。私の顔を覚えていますか？」
「ええ。ずいぶんとご立派になられましたね。どなたかと思いました」
「私の方こそ、驚きました。あの頃よりずっと美しくなられた。まさしく聖女にふさわしい」

エリオット王子は強力な魅了魔法が使えると、ポッドに聞かされていたから、どうなるかと最初は警戒していた。
だが、私にも聖女様にも今のところ変化はなさそうだ。
さすがに他国の王城の中で、むやみに魔法を使うことはないのかもしれない。
そこで、聖女様が王子に私を紹介する。
「そうだ。紹介します。最近、私のお付きになったエミリアです。この子は、カラカネ出身なんですよ」
「そうでしたか。どこかでお会いしたことが……ある……？　……エミリア!?」
王子が私の顔を見て顔色を変えた。
婚約期間中ずっと笑顔を張り付けて表情が変わらなかった王子が、ここまで驚きと困惑をあらわにするとは……と私は少し冷静に考えていた。
「な、なぜお前が」
王子の質問に私は答える。
「お久しぶりです。王子。どうして私がここにいるのか、ということですか？　それは王子の方がよくご存じではないのですか？」
「お前はあの時……森に」

「ええ。森に置き去りにされました。ですが、生きております。それの何がおかしいのでしょうか？」
「なぜ。この国にいるのだ……」
「あなたに殺されそうになったから……では、理由になりませんか？」
緊張で口の中が渇いて、喉が痛い。心臓が痛い。頭だって、ほとんど真っ白だ。
王子が目の前に立っていることが怖くて泣きそうになる。
それでも、聖女様やポッドがいるから、なんとか立って話すことが出来る。
私たちの様子を見ていた聖女様が、私に質問をする。
「エミリア。殺されそうになったとは、どういうことなのでしょうか？」
「私は……この方に魅了魔法をかけられたのです。私の意識がなくなる魔法でした。それをかけられ、魔物が暮らす危険な森に置き去りにされたのです」
私の言葉に慌てたのはエリオット王子だ。
私の存在は完全に計算外だったのだろう。
このまま聖女様に何食わぬ顔をして近づいて、自分の利益になるように操ろうとしていたに違いない。
その計画が崩れようとしているのだ。慌てるのも無理はない。

それに国を治める王族が、人を殺そうとしただなんて知られるのも、まずいだろう。
「それはでたらめですっ！　そのようなことはしておりません」
焦った様子で王子が叫ぶが、聖女様は疑いの目を向ける。
「しかし、エミリアは神託によってこの国に来られた客人。そのエミリアが嘘をつく理由など……」
「神託？　そんな馬鹿な……エミリアは魔法が使えません！」
驚いた様子で王子がそう言うと、聖女様は大きく頷いた。
「ええ。そうですね」
「ご存じなのですか？」
「ええ。存じております」
「それなのに、なぜ？」
王子は、聖女様が魔法が使えない私の味方をする意味が分からないらしい。
本当に変わっていない。
でも、それは私も同じだった。
どれだけ、周りの人に優しくされようと、心の底では人が恐ろしい。
今でも、偉そうにしている男性や、乱暴な男性は恐ろしいし、強く言われると何も出来なくなる。
王子の前に立つと、前のみじめな私に戻ってしまうようだ。

恐ろしくて、自分は生きている価値がない存在に思えて、どうしようもなくなって死んでしまいたくなる。
王子は、魔法が使えない人間の扱いは他の国でも同じだろうという考えなのだ。
だから、魔法が使えない、役に立たない私の言うことを、なぜ聖女様が信じるのか本当に分からないのだろう。
王子の中では、魔法が使えない人間は人ではないのだから。
「ですが、魔法が使えないのは、あなた方も同じでは？」
「え⁉」
聖女様の言葉に驚いたのは私だ。
王子も魔法が使えなくなっている？　なぜ？
聖女様が言葉を続ける。
「あなたの住む国の住民たちは、貴族、王族含め加護を外され、魔法が使えなくなったと聞きます。今日私に会いに来たのもそれが理由でしょう？　違いますか？」
あの国の人たちの加護が外された？　魔法が使えない？
まさか、ポッドたちが言っていた国が崩れるって、このことだったの？
でも、小さな国とはいえ、国民全員の魔法を使えなくさせることなんて出来るの？

そういえば、ポッドは神様と知り合いって言っていたけど、そのことと関係があるの？
妖精の言葉で、国中の人たちが魔法を使えなくなるなんてことありえるの？
……どうして聖女様が妖精を怖がっていたのか、今分かった気がした。妖精って、私たち人間が思っているよりきっとすごくて、強いんだ。
気がつくと、王子はすっかり取り乱していた。
必死に取り繕って笑っているものの、無理をしているのが分かって痛々しい。
「あはは。ご冗談を。私には、まだ魔法の力が残っておりますよ」
王子の言い訳じみた言葉を聞き、聖女様が冷静に返す。
「そうでしたか。ですが、いずれ消えるでしょうね」
「そんなことにはなりません。あなたが、私の国に来て呪いを解くのだから」
「私がなぜあなたの国――」
聖女様の言葉が不意に止まる。
私が違和感を覚えて聖女様を見ると、彼女はぼんやりとした様子で王子を見つめていた。
「もしかして、聖女様に魔法をかけているの!?」
私がそう叫ぶと、王子が嬉しそうに答える。
「聖女と呼ばれているから効かないのでは……と心配していたのだが、私の魔法の方が強かったら

しい。まあ、当たり前か。聖女といえど、ただの女。王族である私にかなうはずなど、なかったのだ。……杞憂だったな」
「どうして……どうしてあなたは」
信じられない。まさか隣国の聖女にまで魔法をかけるなんて。
こんなの国際問題になるに決まっているのに。それすらも分からなくなってしまったのだろうか。
それとも、そんなことを考える余裕もないということなのだろうか。
そう思って周りを見ると、護衛の兵士たちも魅了魔法をかけられているのか、ぼんやりとしている。
「さぁ、聖女。私と一緒に行こう」
王子が声をかけると、聖女様は頷いて部屋を出ようとする。
「はい……」
「駄目ですっ！」
私はとっさに王子の前に飛び出した。
王子は私に冷たく言い放つ。
「退け」
「退きません」

「私は、お前を見逃してやると言ってるんだ。もうお前が生きていようが死んでいようが、私には関係がない。興味もない。私は忙しいんだ。いいから退け」
「退きません」
緊張、恐怖、それから、王子への好意が押し寄せてくる。
それらを必死に宥めようとするが、体が勝手に震えてしまう。
逃げ出してしまいたい気持ちを必死に抑えて、王子の顔を見る。
「聖女様は、この国に必要な方です。それに聖女様が攫われたことを知れば、きっと戦争になりますよ」
「ふん。だから何だ？」
「え？」
「私の国は特別な国なんだ。私たちは選ばれた存在なんだ。だから、どんな国相手でも私たちが負けることは決してない」
「本当に、本気でそうおっしゃってるんですか？」
魔法が使えなくなっているのに？
こうやって、隣国の聖女様の力を頼りに来ているのに？
どうして、他の国に助けを求めているような状況なのに、こうも上から目線なの？

「本当に選ばれた存在でしたら、加護を外されるわけありませんよね」
私の言葉に、王子の眉がピクリと動いた。
私はそのまま思いを吐き出す。
「あなたは選ばれた存在なんかじゃありません！　あ、あなたは最低です。都合がいいんですよ。素直に聖女様に頭を下げて頼めば良かったじゃないですか」
王子は心底不思議そうな顔をする。
「なぜ私が頭を下げなくてはならない」
「自分たちの力だけで解決出来ずに、他国の人の力で問題解決しようというのに、どうしてそこまで傲慢になれるのですか」
「もういい。お前と話しても時間の無駄だ。私たちを待っている人間がたくさんいるのだ。時間もない。行くぞ、聖女」
王子が私を乱暴に押しのけ、部屋から出ていこうとする。
「聖女様っ！」
私は必死に聖女様の腕を引っ張り、部屋から出ていかないように踏ん張った。
王子が私を引きはがそうとする。
「おい、離せっ！」

「嫌です！」
私と王子の綱引き状態になってしまった。
聖女様は、腕や体を無理やり引っ張られているからか、顔を歪ませて苦しそうにしている。
「嫌ですっ！　もう嫌だ！　あなたなんて大嫌いっ！　一人で国に帰っちゃえばいいのよっ！」
私の言葉を聞いた王子は私を殴ろうとして、拳を振り上げて……そのまま姿がかき消えた。
「え⁉」
その場には、突然王子が消えて呆然としている私と、ぼんやりと立っている聖女様だけが残った。
「もしかして、ポッド？」
私はずっと黙って見ていたポッドに尋ねる。
「俺は何もしてないぞ」
「じゃ、じゃあ……王子はどこに？」
「それより聖女は大丈夫なのか？」
「あっ！　そうだ！　聖女様……聖女様！」
虚ろな瞳でぼんやりとしている聖女様の肩をゆすり、声をかけ続ける。
すると次第に瞳に光が戻り、聖女様はハッと気がついたように私を見つめた。
「あ。私……」

「聖女様良かった……」
「エリオット王子は……どこに？」
聖女様は辺りを見渡すと、そう呟いた。
「それが――」
私は、聖女様に王子が消えるまでの経緯を話した。
王子が聖女様を魅了して、国に連れ帰ろうとしていたこと。私が必死に止めたこと。なぜか急に消えてしまったこと。
「そうでしたか……エミリアには迷惑をかけてしまいましたね」
「い、いえっ！　元はと言えば、あの王子が悪いんですっ！　あの人、聖女様を操って、自分の国に連れ帰ろうとするなんて」
「その王子ですが……エミリア。あなた……魔法を使ったんじゃありませんか？」
聖女様の言葉の意味が分からなくて、私は聞き返す。
「え？　でも、私、魔法は使えませんよ？」
「ですが、あなたから魔力を感じます」
「じゃあ、王子が消えたのって……私が、どこかに飛ばしちゃったってことですか？」
「そうかもしれません」

「ど、どうしましょう……国際問題になっちゃいました……王子をどこに飛ばしたかなんて、私分からなくて……あ、ポッド、どうにかして捜したり出来ないかな？」
ポッドにそう尋ねてみるが、ポッドはあまり気にしていないようだ。
「別にいいんじゃないか。捜さなくて」
「え？」
驚く私に、聖女様が尋ねる。
「妖精様は何ておっしゃっているのですか？」
ポッドはなぜだか、聖女様から姿を隠しているのだ。
そして、聖女様にはポッドの声も届かないらしい。
ポッド曰く、そこにいるが、声も姿も認識出来ないだけとのことらしいが。
「王子を捜さなくても良いと」
私がポッドの意見を伝えると、聖女様が頷いた。
「そうですね。私もそう思います。むしろ、こちらは正当防衛ということになります。一国の聖女を洗脳、誘拐だなんて国によっては戦争の引き金にもなりかねません。聖女付きであるエミリアは、聖女を守った。褒められることはあっても、その逆は絶対にありません。隣国には使いを出しましょうか」

「大丈夫なんでしょうか？　王子は」
私の心配をよそに聖女様の表情は冷たい。
「自業自得としか言えませんね」
その後、聖女様に「この件は私の方でなんとかしますから、エミリアはもう帰って大丈夫です」と言われて、私は家に帰されてしまった。
今さっき起きたことなのに、考えることが多すぎて、どうしたらいいのか分からない。
気がつけば、私は家の近所にある農園の周りを歩いていた。
「本当に私、魔法が使えるようになったのかな。変わった感じは全くしないんだけど」
私の疑問にポッドが答える。
「聖女の言う通り、魔力を感じる。エミリアは魔法が使えるようになってるぞ」
「こんな急に？　どうしてだと思う？」
ポッドは歯切れが悪そうに口を開く。
「……さあ。もしかしたら、エミリアの両親も今頃は魔法が使えなくなっているのかもしれない。それと関係しているのかもな」
「あ、そっか……」
その言葉に納得する。

聖女付きになったあと、私はポッドから、お父様とお母様の二人が私に呪いをかけたという話を聞いた。
魔法が使えなくなれば、呪いもなくなる……のかな？
呪いに関しては、私にはよく分からないけど、こうして魔法が使えるようになったことは素直に嬉しい。
一生魔法が使えないと思っていたのに、まさか使えるようになるなんて！
私は他にも気になったことをポッドに聞く。
「お父様もお母様もお姉様も魔法が使えなくなってるのよね……本当に、あの国の人たち全員が魔法が使えなくなることなんてあるの？」
「ああ」
「それって、ポッドが……どうにかしたの？　私のせい？」
「違う。もうとっくに傾いていたんだよ、あの国は。じゃなきゃ加護が外されるわけがない。エミリアが何に責任を感じているのかは分からないが、不安に思うことなんて何もないから大丈夫だ」
「でも……それに、王子を……どこかに飛ばしてしまった」
「エミリア。あの時はとっさのことだったんだから」
「私、王子にされたことと、同じようなことをしてしまった」

聖女見習いたちと兵士は、今も行方不明だ。生死も不明と聞いている。
ということは、同じように消えてしまった王子も、見つかる可能性は低いだろう。
あの時は必死だった。仕方ないことだって分かってる。
でも、もしかしたら王子は死んでしまうかもしれない。
私の考えなんてポッドには分かっているみたいで、「いいか？　エミリア」といつものように、私を慰めるために優しい声色で言葉をかけてくれる。
「エミリア。最初に手を出してきたのは向こうだ。聖女も言ってただろう。一国の聖女に手を出すことは、国の防衛に手をかけているようなものなんだ。どんな理由があっても、それだけはやってはいけないことなんだ。そのことを知らなかったのかもしれない。あの国、カラカネには聖女がいなかったからな。でも、仮にも一国の王子様が、そんな常識も知らないで、手を出したことがそもそもの問題なんだ」
ポッドが、私に言い聞かせるように話を続ける。
「あの国は、あまりにも物を知らなすぎたし、傲慢すぎたんだ。エミリアがやらなくても誰かがやっていたさ。むしろ、エミリアが聖女を守り切れなかったら、それこそ国から責められたかもしれない。だから、いいんだ。よくやったよ。エミリア」
「……私、これからは魔法を勉強する。あんな風に突発的に使うんじゃなくて、ちゃんと使いたい。

向き合いたい。出来るかな？」
私の言葉に、ポッドは頷いた。
「出来るさ」
空はもう暗くなっていた。
もうすぐ始まるお祭りの準備で、遠くから人の声が聞こえる。
今日あった出来事もきっと世の中の人には知られることなく、明日が始まるのだろう。
私はそんなことを考えながら呟く。
「お祭り、もうすぐだね」
「そうだな」

◇　◇　◇

「……？」
いつもなら重くだるい体が、すっきりとしていてとても軽い。
私はぴょいとベッドから抜け出る。
体の中に炎が焚かれているみたいにとても温かい。
それに、何だかわくわくして、体の内側から力が湧いてくる。

これは何なのだろう。
今なら、何でも出来そうな気がする。
そして、私は喉が渇いているのに気づき、水を飲むために台所に行こうとして、立ち止まる。
気がつくと、手のひらから水が湧き出ている……！
「ポッド!!」
自分でも驚くほど大きな声が出た。
「何だ!!」
私の大声に驚いたのか、同じベッドで寝ていたポッドが、ポンッと音を立てて一瞬で私の前に現れた。
「水……が！　手のひらから、お水が！」
驚きで上手く言葉が出ない私に、ポッドは冷静に話す。
「うん？　……エミリア……これは魔法だ……」
「え？」
私は、手のひらから溢れる水を眺めた。
これが魔法。本当に使えるようになったんだ。
「嬉しい……」

しばらく涙が止まらなかった。
本当に魔法が使えるようになった。
これで、人の役に立つことが出来る。これで、もう下を向かないで済む。
ポッドも嬉しそうな様子だ。
「だから言ったろ？　エミリアは魔法が使えるようになってるって」
「うん……」
何もかも夢みたいだ。
こんなに上手くいっていいのかって思う。

気持ちが落ち着いてから、私は支度をして大聖堂に向かった。
そこには、いつも通り聖女様がいて、私に挨拶をする。
「おはようございます。エミリア」
「おはようございます。聖女様。あの、私、本当に魔法が使えるようになりました」
私の報告に、聖女様は嬉しそうに答える。
「おめでとうございます。こんなこと、中々ありません。奇跡と言ってもいいくらいです」
「そうなのですか？」

「はい。でも、エミリア。あまり公言しない方がよろしいですよ。魔法が使えなかった人間が、いきなり魔法が使えるようになったなんて知られたら、きっとあらゆる国がエミリアを欲しがるでしょうね」
「私が他の国でもお役に立てるということでしょうか？」
他の国の手伝いも出来るようになれば、聖女様のお役にも立てるし、この国にも恩返しが出来る。とっても良いことのように思えるのだけど、聖女様の顔は暗い。
「いえ、その……きっと研究されるでしょう」
「研究？」
「本来、魔法が使えない人間は、一生使えないと言われています。それなのに、エミリアは使えるようになった。その理由を皆知りたがるでしょう」
「知られてはいけないものなのですか？」
私と同じように魔法が使えないことで苦しんでいる人がいるのであれば、調べてもらうことによって、その人の助けになるのかもしれない。それの何がいけないのだろう？
考え込む私に、聖女様が説明を続ける。
「誰かのために力になりたい。役に立ちたいというエミリアの気持ちは分かります。ですが、その気持ちを利用するような人間がいるということですよ」

立ち読みサンプル
はここまで

「すみません。お話がよく……」
「先日、王子が私にしたようなことを、今度はエミリアがされる恐れがあるということです」
その言葉で、ようやく聖女様の言いたいことが分かった。人を人と思わないような扱いを受ける可能性があるということを、聖女様は言いたいのだろう。
でも、教会で働く関係者は、すでに私が魔法が使えないことを知っている。
魔法が使えるようになったと知られれば、噂となって他国に伝わる可能性もあるだろう。
「分かりました。私からは言いません」
「そうした方がいいと思います。……さぁ、暗い話は置いておいて、明るい話をしましょう。今度、開かれるお祭りのことですが――」
聖女様は、お祭りの日のスケジュールを私に教え始めた。

◇　◇　◇

そして、ついにお祭り当日。私はポッドと聖女様と一緒に、大聖堂の中にいた。
今朝から、プレッシャーで胸が苦しい。
「ほ、本当に私が参加していいのかしら……」
こんな神聖な祭りに私ごときが、参加して怒られないかしら。